

視機能障害と運転

藤田保健衛生大学 医学部眼科学教室 准教授 谷川 篤宏

現代社会において自動車は欠くことのできない交通手段の一つである。本邦における運転免許保有者数は年々増加し、平成20年には約8千万人にのぼっている（警察庁、運転免許統計平成20年版）。また人口の高齢化に伴い、運転免許保有者における高齢者の割合も増加している。内閣府から発表された交通安全白書（平成21年度版）では道路交通安全施策の現状として、(1) 道路交通環境の整備、(2) 交通安全思想の普及徹底、(3) 安全運転の確保、(4) 車両の安全性の確保、(5) 救助・救急体制等の整備を挙げており、そのうち(3)においては高齢運転者対策の充実が明記されている。

一方、運転能力においては視力や視野などの視機能が重要な役割を果たしていることは想像に難くない。種々の眼疾患や脳梗塞などにより視機能が低下している状態での運転に与える影響や、その治療後の視機能改善に伴う運転能力の向上に関しての報告も多々ある。またそれらの眼疾患のうち、加齢に伴い有病率が増加するものも報告されており、運転免許保有者の高齢化が進んだ場合には、運転能力に影響しうる視機能障害を有する人の割合も増加する恐れがある。

本講演では白内障や緑内障、ドライアイ、加齢黄斑変性、レーザーによる屈折矯正手術の一つであるLASIKといった比較的なじみのある眼疾患や治療の視機能障害と運転への影響について、最近の国内外で発表された論文のreviewを行い、その特徴と問題点について考察する。